

2 度目の万国博覧会



いこま まさお
生駒 昌夫

(株)きんでん 会長／元電気学会会長

今年はいよいよ1964年(昭和39年)以来56年振り、2度目の「東京オリンピック、パラリンピック」である。前回の6年後の1970年(昭和45年)には『大阪万博』が開催され、今回は5年後の2025年(令和7年)に2度目の『大阪・関西万博』が開催される。

1970年の『大阪万博』は1964年のオリンピック同様、アジア初の開催でもあり、77か国参加のもと6,400万人を超える入場者数があった。私は高校3年生であったが、会場が家から近く、何度も足を運び、人気パビリオンの長蛇の列に並んだ思い出がある。「人類の進歩と調和」をテーマに、様々な文化・芸術・技術などが展示・紹介されたが、特に印象に残っているのは、「月の石」「動く歩道」「ワイヤレスフォン」「テレビ電話」「人間洗濯機」「電気自動車」「電波時計」「エアドーム」他にも「ケンタッキーフライドチキン」といった当時の我々では想像も出来なかったようなものである。我が国は高度経済成長の最中であり、いわば「国威発揚型万博」と言える。

そのような「世紀の祭典」であった万博の電気設備は空前の規模であったが、弊社をはじめ電気工事各社は、各国・各企業のパビリオンの他、地中配電線工事など膨大な工事を短期間に完工した。先人達の努力・熱意には敬意を表せずにはいられない。

それから半世紀の時を経て、再び大阪で万博が開催される。今回の万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」である。会場となる大阪湾の埋立地である「夢洲」でのインフラ整備や、前回と同じように各国・各企業のパビリオンが作られるのか、あるいはVRといった新技術が多用されるのかといった具体的な内容は、これから議論が進められる。

1970年の大阪万博で夢の乗り物として模型が展示されていたリニアモーターカーは、品川-名古屋間で2027年の開通を目指して工事が進められている。営業運転速度は時速500kmであり、開通すれば品川-名古屋間を約40分、品川-大阪間を1時間で結ぶことができる。また、当時は人の顔ほどの大きさもあったワイヤレスフォンは今や手のひらサイズのスマートフォンに進化し、電話だけではなくメール・写真・インターネット・カーナビ・決済など、数え上げればきりが無いぐら

いに驚くほど多くの機能が利用できるようになった。

1970年当時は夢のそして未来社会のものであったが、今、現実のものとなっている。いや、それどころか、当時描いていた未来のさらに先の時代に今、我々は生きているのかもしれない。このような時代の2度目の「大阪万博」では、人々に夢を持ってもらえるようなものではないと満足していただけるはずもなく、2,800万人と想定されている来場者見込みの達成も難しくなるかもしれない。

そのためには、これから顕在化する「地球環境問題」「少子高齢化」「健康寿命の延伸」「貧富格差の解消」「ダイバーシティ」といった様々な課題への道標を提供することが必要ではないだろうか。言い換えれば「課題解決型万博」と言えるかもしれない。狩猟社会⇒農耕社会⇒工業社会⇒情報社会に続く新たな社会(Society5.0)が一つの解かもしれない。

「言うは易く行ふは難し」という言葉がある。確かに、これらの課題は一朝一夕で解決できるようなものではない。だが、できないと諦めてしまえば進歩は止まる。まずは、「こんなこといいな、できたらいいな」と思い描くことから始まるのではないか。電気学会設立総会での志田林三郎博士が予測、そのほとんどが実現した「電気工学が実現し得る未来技術」そのものではないだろうか。

人間は、これまでも様々な「できたらいいな」を実現させてきた。今我々が生きている社会は、様々な問題を抱えながらも、過去の人々が知恵を絞り、試行錯誤を繰り返しながら、進歩を続けてきた社会である。過去の人々が未来のものとして思い描いたその先の未来を、我々は生きている。我々が思い描く未来、いや、我々の想像を超える未来は、いつかやってくる。それを実現せしめるものは、科学技術の進歩である。昨今の急速な科学技術の進歩は、電気電子工学の発展が基盤にあったといえよう。

しかし私にとって1度目は17歳、2度目は72歳。55年の時を経て迎える万博を純粋にただ楽しみたいと思う。弊社も関連する電気工事に精一杯尽力したい。

「いのち輝く未来社会のデザイン」—我々が思い描く未来社会の実現に向けて、科学技術のプラットフォームである電気学会が果たす役割は大きい。